信仰マッチョ化 暴力的な忠誠

米大統領選に向けた10日の討論会は、ハリス副大統領がトランプ前大統領に攻勢をかける場面が目立った。それでも、トランプ氏の人気は底堅く、大接戦の構図に変わりはなさそうだ。奇異と思える言動も多いトランプ氏なのに、なぜ今も支持されるのだろうか。

神学者
森本（もりもと）　あんりさん

1956年生まれ。東京女子大学学長。専門は神学・宗教学。米国の宗教や思想に詳しい。著書に「反知性主義」「異端の時代」「キリスト教でたどるアメリカ史」「不寛容論」など。

――トランプ氏がなぜ支持されるのか。ご専門である宗教の観点からは何が見えるのでしょうか。

「よく知られているのは、トランプ氏の有力な支持基盤の一つにキリスト教福音派があることです」

――福音派とはどういう集団なのですか。

「米国はキリスト教、特にプロテスタント信仰を精神的基盤にした国家です。プロテスタントのうちの非主流派が総称的に福音派と呼ばれ、20世紀後半以降、存在感を増しています」

「特徴は、書かれている言葉の通りに聖書を読もうとすることです。2千年前に書かれた聖書には当然、原子爆弾もAIも出てきません。主流派は現代にあてはめる形で聖書を読み直そうとするのですが、福音派は聖書の言葉をそのままの形で受け取ろうとします」

――実際にどういう違いとして表れるのでしょう。

「たとえば聖書には同性愛の否定と読める記述があり、福音派の人はそれを理由に同性愛に反対します」

「それに対して主流派の多くは、当時の言葉をその背景から理解しないとダメだと考えます。2千年前には性的指向や性自認への理解がなかった現実を踏まえて、平等や愛の意味を現代的にとらえ直す方向で、聖書を読み直すのです」

――そうした宗教的な違いは、いまの米国政治やトランプ支持の現象にどう反映されているのでしょう。

「進歩派と反進歩派の対立として表れています。20世紀後半以降の米国では、平等な社会の実現に向けて女性や少数派の権利を尊重する流れが強まりました。他方それは、一連の流れを知的エリートによる進歩的な改革と見て反発する動きも引き起こしました。福音派の伸長は、エリート支配が固定化することへの反発や進歩に対する反動でもある。それがトランプ氏への支持とつながっています」

――奇異な言動もするのに支持が続く背景に、米国特有の宗教的思考があるとも指摘してきましたね。

「ええ。『富と成功の福音』と私が呼んでいるものです。特徴は『成功している人は神から祝福されている人だ』『神の祝福を受けているのならその人は正しい人だ』とみなすことです。この論理で言うと、トランプ氏が現世で成功しているのは神が祝福しているからに違いない、となる。人間的には問題があっても正しい人だという結論が導かれうる点が、重要です」

――実際のトランプ政治や選挙戦を見て気になっていることは何ですか。

「男性性と暴力の問題が浮上してきていることです。2021年にトランプ氏の扇動で起きた連邦議会議事堂襲撃事件。主導した集団の名は『プラウドボーイズ』でした。男性性を強調する集団だったのです。日本でよく理解されていないのは、それが彼らのキリスト教信仰と深く関わっていることです。彼らの中ではキリスト教と男性性の賛美、トランプ氏への忠誠がすべてつながっています」

――なぜつながっているのでしょう。

「私が注目するのは、20世紀に米国のキリスト教内で進んだマッチョ化です。荒々しい男性文化の象徴だった西部開拓（19世紀）が終わり、世相が軟弱化したことに反発を覚えた人々が、宗教を男性的に作り替える動きを進めたのです」

「強い忠誠心を重視し、信仰を『男のロマン』とみなす運動で、『筋肉質のキリスト教』とも呼ばれます。知的で洗練された都市文化への反感を基盤にする点で、現代の福音派や共和党支持層に重なります」

――今回、民主党の新しい大統領候補になったカマラ・ハリス氏は女性です。

「ハリス氏は男性性と暴力の政治との対峙を迫られていますが、大統領になれれば変革を起こせます。男性中心神話を求めている人々に、世界は男性中心に回っているわけではないとの現実を突きつけられる。今ある希望の一つです」

――「男性性と暴力」に向かう流れに、宗教自体が何らかの歯止めになる可能性はないのでしょうか。

「米国の福音派の中にも、聖書の教えに基づいてトランプ氏を批判する人がいます。社会的弱者や外国からの寄留者を守りなさいという教えに反している、と主張しているのです」

「米国史を振り返ると、奴隷制に反対したり様々な権利を拡張したりする運動の背景には、キリスト教の改革運動がありました。困難な道ではありますが、宗教が米国社会を自省的・批判的に見直す契機になる可能性に期待しています」

（聞き手　編集委員・塩倉裕）